とある、スーパーの女　　岡本　悠

柳田は、今日も、このスーパーで、買い物した

１年半前に、引っ越した

それ以来、ここのスーパーを頻繁に使っている

最近は、土・日くらいだ

品定めにおいて、柳田は、光の出具合をチェックしていた

１時間くらい、スーパーに、入り浸ることもあった

ある、女性が魚をさわった

しらばくして

同じ、魚を俺がさわったら

女は、気持ち悪がって、逃げていった

俺は、目についた、女の客を追いかけた

目で、見つめた

オーバーヒートしそうなほど

いろんな女性を追いかけた

防犯カメラが設置してあった

ある日は、警察が、スーパーにうろついている

俺は、追った

俺を探しているのかもしれない

店に、訴えられたのかもしれない

女店員には

茶髪で、美人の、山崎さんという人がいた

俺は、この人をレジで

マジマジと見つめた

買い物袋に、食材を詰め込む時も見つめて

帰り際にも、見つめた

さすがに、気づかれた

警戒された

恐がっていた

脅えていた

ただ、俺は、こういうのが嫌いじゃなかった

軽犯罪者である

ある時は、若い女の客３人をジーッと見つめていたら

勘づいた１人の女性が

別のレーンに行ったあと、噂していた

それを、２人が聴いていて

１人は、「えっ、全然気づかなかった、マジで...」

と、言っていた

ある時は、夫婦の女性を見つめていたが

女が男に訴えたので

男と、しばしの睨み合いになったが

「あの人、どうしたんだ」という態度をとり

結局、去ってしまった

調理室では、

後進国のアマンダがいたが、

柳田は、アマンダを見つめまくった

なぜ、神は、こういう後進国の女を見たがるのかわからなかったが

向こうも、嫌になるくらい、見られていることがわかった

でも、なぜか、あまり怖がっている感じはない

むしろ、不思議だ、という感じだった

山崎さんは、通路で俺を見つけると

一気に引き返して

ドアを開け、店の裏口へ入った

冬が過ぎて、夏が来て、また冬が来て、春になった...

俺も、そこまで、馬鹿じゃなくなった

ある程度見たら、それ以上は見なくなった

ただ、スーパーに入ったら

今日のレジの女性は、誰かは確認した

山崎さんがいたら

多少、行列でも、そこに並んだ

横断歩道で、外国人の男がこちらを見つめていた、いつものことだ、だから、視線を返すと、しばらく睨み合ったが、向こうは外した、そのあと、俺は外して、外国人は再戦をしようとしたが、顔がかゆかったので、構わなかった

今日は、アマンダはいなかった

最近は、マコがレジを担当することもある

若いが、かなり偉い立場を任されているようだ

マコとは、最近は視線がぶつかる

この間は、店の電話で話していたので

それを見つめた

俺は、鼻歌で、福山雅治の「はつ恋」を歌っていた

三上さんも、当初、俺にカードの使い方を教えてくれた人だ
黒縁のメガネをかけている
えてして、恋心はなかったが、なんとなく気になった

両親との、昼食会に備えて、焼肉屋を探した

１人の女性は、酷く、俺の視線にビビッて　いた...

俺は、今日は、もう、すべてを神に壌土していた、もう、昨晩から、俺は神になっていた、
俺と神ではなく、もう、神１人になったのだ

神は、男を睨まない約束を守ってくれた
あの、外国人以外は...
でも、売られた喧嘩の場合は仕方がない合点がいった

ぬいぐるみ、は、言った
どうして、そんなに、堅いの？
どうして、そんなに、頑なの？

それが、俺のいけないところだ

神になっても、まだ迷路だった

俺は思った、もうすべて、全部、神がやってくれればいい、それが一番、望んでいること

珍プレー好プレー大賞で、笑ってしまった時、自分を恥じた

これでは、完璧な神ではないと...

幾分、今日、小説を書いてしまうことにも、抵抗があった

神は、神がそんな愚かなことをするなよ、と言っていたからだ

でも、柳田は、気になった、このゲロは吐いておかないと...

柳田は、神がもっと厳しければいいのに、と思った

歯医者の予約は、神から３時半だ、という連絡すら、裏切りに感じた

もう、本当に、神が１本でいいから

俺は、柳田は、死んだことにしてくれ、

完全に死んだことにしてくれ

そうじゃないと、神、にならないから

神だけで生きてくれ

で、しまいには、あとの人生、どうやって生きるの？　である

さして、今日は暑いから、アイスと、氷、魚介類の寿司系を買った

店に入ると

奥のほうで、山崎さんとマコが話している

久々だな、こんな豪華な２ショット

俺は、ジロリと見た

向こうは、気づかなかった

今日は、神に全権依頼していたから、メモは持っていかなかった

山崎さんの列を見つけた

１人の女性が俺に順番を譲った

そして、レジにカゴを置くと、山崎さんと目が合った

メガネをかけた俺を見るのは、初めてだろう

山崎さんは、多分、もう、脅えていなかった

信頼してくれたのかもしれない

俺は見つめた、バレナイように

綺麗は綺麗だが、俺より下だ、という感覚が入ってしまった

俺のほうが強い人間だと、思った

会計の際、マコが横切った

俺は、マコをジーット見つめた

そのあと、少し綺麗な茶髪の客を見つめた

山崎さんは、俺の視線に気づかず、一生懸命レジを打っている

マコはマコで、隣のレジで説明をしている

俺は、俺で、アップテンポの福山雅治の「生きてる生きてく」を唄った

人生は長い、40 年では、まだ、神になれないのか？

明日から、今度の昼食会まで、１週間、何も用事がない

嬉しい反面、神の答えを見つけ出さなきゃいけなかった

神が１人で勝手に生きて、俺の感情が死ねばいいと思った

なぜ、そうならないのか？

神は言った

「神は、柳田、お前だよ」

俺の中でバラバラとパズルが崩れた

何かが見えてきそうな気がした

でも、遠かった...

山崎さんも、マコも、三上さんも...

すべては、神の、神芝居

スーパーマンには、なれなかった

「完」